

【論説】

未来の複数性への責任

——ハンス・ヨナスにおける「出生」概念の受容

大阪大学大学院医学系研究科医の倫理と公共政策学教室特任研究員

戸谷 洋志

はじめに

本稿の主題は、ハンス・ヨナス (Hans Jonas 1903-1993) の倫理思想を検討し、未来への責任と人間の複数性との関係を考察することである。ヨナスは名著『責任という原理』において、科学技術文明の潜在的な危険性を指摘し、これに対応すべき新しい倫理学として、未来への責任の基礎づけを試みた。同書は、当時まだ黎明期にあった環境倫理の領野にはじめて包括的な理論的基礎を提供し、後に世代間倫理と呼ばれる問題圏の開拓に寄与した。また、環境問題に対する国際的な関心の高まりにも働きかけ、1992年に国連によって発表された「環境と開発に関するリオ宣言」や、ドイツにおける環境保護政策の拡充を動機づけたと評価されており、現代社会に広範な影響を及ぼしている。

そうしたヨナスの倫理思想において重要な役割を果たす概念の一つが、「出生 (Natalität)」である。もともと「出生」は政治思想家のハンナ・アーレント (Hannah Arendt 1906-1975) によって提唱された概念であり、特にその政治思想において人間の複数性を説明するために用いられたものである。ヨナスはアーレントから同概念を受容し、未来への責任を考察するための不可欠の条件として、「出生」の重要性を指摘する。ただし、アーレント自身は出生概念から未来倫理を論じているわけではない。したがってヨナスによる出生概念の受容は、同概念をもととの文脈から切り離し、ヨナス独自の文脈へと組み込み、組織化するという形で行われている。こうした受容に注目することで、ヨナスの未来倫理がアーレントの政治思想と交錯する点を明らかにし、未来への責任

における人間の複数性の次元を考察することが、本稿の目的である。

同時に、そうした仕方で受容されている以上、そこには出生概念に対するヨナスの独自の解釈と修正が伴っている。本稿は、以上の主題に取り組む過程で、出生概念をめぐるヨナスとアーレントの類縁性とともに対立点を明確化させ、両者の思想史的な連関を明らかにしていく。

先行研究において、ヨナスとアーレントの交流や比較については一定の蓄積があるものの、それらにおいて多数派を占めているのは、主として両者の私生活における関係を主題とするもの¹や、両者の立場の違いをあくまでも対照的にのみ描き出そうとするもの²である。一方で、ヨナスが『責任という原理』において出生概念を援用しているという事実に対して、相応しい主題的な検討が行われないうままでいる。これに対して本稿は、出生概念の受容に注目することで、両者の思想史的な連関を明らかにし、同時にその連関から炙り出される対立点を指摘する。ここに本稿の先行研究に対する新規性がある。

1. アーレントにおける出生概念

考察の出発点として、アーレントによる出生概念の規定を確認する。同概念が主眼的に検討されているのは『活動的生』においてである。同書のテーマは「私たちが行っていること」の分析であり、「人間の条件の最も基本的な要素を明確にすること、すなわち、伝統的にも今日の意見によっても、すべての人間存在の範囲内にあるいくつかの活動力を扱う」³ことである。アーレントはそうした活動力を「労働」、「仕事」、「活動」の三つに区分し、これらによって形作られる「活動的生」を、観照を基礎とする「観照的生」に対置する。同書においてアーレントが試みるのは、活動的生活と観照的生活との優劣関係、および活動的生活の内部に属する労働・仕事・活動の優劣関係が時代の経過に伴って被った変容を、古代ギリシアにまで遡りながら描き出すこととして要約できよ

¹ cf. Wiese (2007)、Auras (2008)

² cf. Lowrance (2008)、出雲 (2010)

³ Arendt (1967) 12

う。その際、「労働」、「仕事」、「活動」という各概念はそれぞれが別の仕方では人間の生と死に関係するものとして規定される。アーレントは次のように述べている。

労働は、個体の生存のみならず、種の生命をも保障する。仕事とその生産物である人間の工作物は、死すべき生命の空しさと人間的時間のほかなない性格に一定の永続性と耐久性を与える。活動は、それが政治体を創設し維持することができる限りは、記憶の条件、つまり、歴史の条件を作り出す。また、労働と仕事と活動は、未知なる人として世界に生まれる新来者が絶えず流入することを予定し、それを考慮に入れ、彼らのために世界を与え保持する課題をもっている。その限りで、出生と深く繋がっている。しかしながら、この三つの活動力のうち、とりわけ活動は、出生という人間の条件に最も密接な連関をもつ。というのは、誕生に固有の新しい始まりが世界で感じられるのは、新来者が新しい事柄を始める能力、つまり活動する能力をもっているからに他ならないからである。この創始という点では、活動の要素、したがって出生の要素は、すべての人間の活動力に含まれているものである。このことが意味しているのは、これらの活動力が、誕生によって世界にもたらされ、出生という条件のもとにある本性によって熟達される、ということ以外の何物でもない⁴。

ここで示されている通り、「政治的思考」にとって中心的な機能を果たす範疇は「出生」である。アーレントに拠れば「活動」の条件は人間の複数性であり、「地球上に生き世界に住むのが一人の人間ではなく、複数の人間であるという事実」⁵である。人間の複数性とは、同一の本質をもった人間が多く存在するというのではなく、「私たちが人間であるという点では同一でありながら、誰一人として、過去に生きた他人、現に生きている他人、将来生きているだろう他

⁴ *ibid.* 15-16

⁵ *ibid.* 15

人と、けっして同一ではない⁶という性格である。こうした複数性を前提にするからこそ、「創始」、すなわち新しく何かを始めるということが人間に可能なのであり、また人間の誕生が新しい人間の始まりとして理解されるのである。アーレントに拠れば、「人間は、その誕生によって、『始まり』、新来者、創始者となるがゆえに、創始を引き受け、かつ活動へと促され⁷るのである。

以上のようなアーレントによる出生概念の規定は次のよう整理される。第一に、それは人間の生命の「始まり」の条件である。しかし、その「始まり」は単に生物学的な生命の開始だけを意味するのではなく、その「始まり」を自ら引き受けることの条件でもある。アーレントに拠れば、「この始まりに対してわれわれは自ら進んで何か新しいことを始めることによって応答する⁸」のであり、「言葉と行為によって私たちは自分自身を世界に挿入する。この挿入は第二の誕生に似ており、そして、この誕生において、私たちはもともと肉体として出現したのだという明白な事実を確証し、それを自分に引き受けるのである⁹」。したがって、第二に、「出生」は「新しいことを始めること」、つまり新しい政治的活動の可能性をも含意している。さらに、新しいものとして誕生する人間は、過去の人間とも、これから生まれてくる人間とも異なる代替不可能な存在である。アーレントに拠れば、「人間は一人一人が唯一の存在であり、したがって、人間が一人一人誕生するごとに、なにか新しいユニークなものが世界にもちこまれる¹⁰」。そうである以上、第三に、「出生」は人間の唯一性を可能にする概念でもある¹¹。

アーレントは、こうした出生概念に基づいて、互いに異なりながら共に生きている複数の人々が現れ、言論と行為によって活動を始める領域を、公共性として解釈する。その意味で、アーレントにとって「出生」は公共性の可能性の

⁶ ibid. 15

⁷ ibid. 166

⁸ ibid. 166

⁹ ibid. 165

¹⁰ ibid. 167

¹¹ cf. 山口 (2008) 2

条件に他ならない。

2. ヨナスによるアーレント解釈

ヨナスとアーレントはもともと学生時代からの親友だった。二人はともに戦後の拠点をアメリカに置き、ニュースクール大学の教授として同僚にもなっており、日常的に哲学的な対話を行っていた。1975年にアーレントが死去すると、ヨナスは彼女の葬儀で弔辞を務め、翌年には「行為、知識、思考——ハンナ・アーレントの落穂ひろい」と題された論文を発表する。同論文は、アーレントの「特に哲学的な部分」¹²に焦点を当て、その思想の全体像と主要概念を総説し、ヨナスの視点からアーレントの思想史的な意義を総括しようとするものである。ヨナスに拠れば、アーレントの遺産においてももっとも高く評価されるべきなのは「出生」をめぐる議論に他ならない。ヨナスは次のように述べる。

「出生」によってハンナ・アーレントは、新しい言葉を鑄造しただけでなく、人間をめぐる哲学の議論のなかに新しいカテゴリーを導入したのだ。「可死性」は常に反省的な精神を支配してきたし、そして死を忘れるなという死をめぐる思索が、宗教および哲学の思想の中心から離れたことはなかった。しかしその反対、私たちすべてが誕生し、新参者として世界にやってきたという事実は、私たちの存在をめぐる昔からの反省のなかで、奇妙なほどに無視されてきた。彼女は、「可死性」ではなく「出生」こそが、形而上学的な思想から区別されるものとしての政治的な思想の中心的なカテゴリーでありうる、と宣言する。そのとき、彼女は非常に意識的に新しいことを語っているのである¹³。

私には、ハンナ・アーレントがこうした無視を明確に自覚していたかどうか、分からない。ともかく、私は常にそうした無視に困り果ててきた。た

¹² Jonas (1976) 26

¹³ ibid. 30

たとえば、「出生」として示される扱いに困る事実について、デカルトが理解しえたことのすべては、人生は子どもとして始められなければならない、という短絡的な観察である。それが意味しているのは、私たちの批判力がまだ発達していないために、私たちは精査されていないしばしば誤った見解を教師によって詰め込まれてしまった、ということであり、そうした見解は、後に「方法的懐疑」によって克服されるべきハンディキャップ以上のものではない¹⁴。

ここ示されている通り、「出生」概念に対するヨナスの評価は、第一に、それが伝統的な哲学において忘れ去られていた問題を呼び起こす概念であるということ、そして第二に、それがただ新しいだけではなく、伝統的な哲学に対するヨナス自身の違和感と共鳴するものであった、ということである。伝統的な哲学は、人間がこの世界に新しいものとして誕生するという事実に対して、あまりにも無関心であり、同時にそれをネガティブにしか評価してこなかった。それはヨナス自身にとって長年の不満であった。この不満を概念的に解消し、さらにここから包括的な「哲学的人間学」を説明してみせたということこそが、ヨナスにとってのアーレントの思想の意義だったのである。

以上のようにアーレントを高く評価するヨナスは、その後、出生概念を自らの思想のうちに取り込んでいく。アーレントが死去する1975年以前に、ヨナスが出生概念を援用したことはなく、また人間の誕生に対する議論も前景化してはいなかった。しかし同年以降、ヨナスは一転して積極的に出生概念を用いるようになる。以下では、ヨナスの名著『責任という原理』を中心としながら、ヨナスが同概念をどのように受容していったかを検討していく。

3. 『責任という原理』の概要

『責任という原理』における出生概念の受容を解明するのに先立って、まず、

¹⁴ ibid. 30

同書の概要を確認しておく。

『責任という原理』の主題は科学技術文明の危険性に対応しうる新しい倫理学を基礎づけることである。ヨナスに拠れば、今日の科学技術文明によって人類の力はかつてないほどに拡大し、その影響は遠い未来にまで及ぶようになった。それによって、現在世代がまだ生まれていない未来の世代を傷つけるという、これまで考えられたことのない問題が浮上している。「人間の本性の変化は倫理学の変化をも要請させる」¹⁵。すなわち、科学技術文明に対応する倫理学は、まだ生まれていない未来の世代への責任という、まったく新しい問いに取り組まなければならない。

ヨナスは、伝統的な倫理学の暗黙の前提として、行為の関係者が同じ時代に生きている、という時間的な条件を挙げている。ヨナスに拠れば、伝統的な倫理学において「私の行動に権利要求を掲げてくるのは、現在生きている人たち、そして私と何らかの仕方で交流している人たち」であり、「すべての道徳性は、行為のこの近接範囲に見合っしつらえらえてある」¹⁶。ヨナスは、こうした条件のもとで構成されている伝統的な倫理学を「同時性の倫理学」¹⁷と呼称している。同時性の倫理学は、同時代の人間だけに注目しているために、人間関係を常に相互的なものとして捉える。ヨナスに拠れば、こうした相互性を前提にするからこそ、「私の義務は他者の権利に私の側で呼応するものであり、他者の権利は、私の権利が他者へと投影されたもの」¹⁸として解釈することが可能になる。しかし、未来への責任は、こうした同時性の倫理学によっては説明されえない。何故なら、倫理的な配慮の対象となる未来世代は、現在においてはまだ存在していないため、現在世代と未来世代とは相互性な関係にないからだ。また、存在してない以上、未来世代は現在においてはいかなる権利も要求することができない。したがって、未来への責任の基礎付けは、「権利という観念か

¹⁵ Jonas (2003a) 15

¹⁶ ibid. 23

¹⁷ ibid. 39

¹⁸ ibid. 84

ら、同時に相互性という観念からも完全に自由でなければならない」¹⁹。これは、同時性の倫理学の、言い換えるなら伝統的な倫理学の理論的な前提を覆す要求である。ここに未来への責任の基礎づけが抱える原理的な困難が示されている。

ヨナスは、こうした問題を解決するために、非相互的な関係を前提とする責任概念を検討し、その一つの経験的な例として、子どもへの責任を挙げる。「生まれたばかりの子ども。その呼吸は、ただそれだけで、周囲に対して反論の余地なく、自分を世話することへの当為を向ける。見れば分かることである」²⁰。ヨナスに拠れば、子どもはただそこに存在しているだけで、周囲の大人たちに対して、その子どもを守らなければならないという責任を喚起させる。このとき、子どもは大人に対して言語によってそうした責任を要請するとは限らない。むしろ、たとえ相互的なコミュニケーションが欠落しているのだとしても、子どもが存在しているという事実そのものが大人にとっては責任の根拠となるのである。ヨナスは、こうした子どもへの責任を、親が子どもに対して抱く愛情に還元するのではなく、子どもの存在そのものがもつ善によって説明する。

こうした経験的な明証性を合理的に説明するために、ヨナスは次のような形而上学的な命題によって責任概念を規定する。責任の根拠とはそれ自体で存在する善である。ヨナスに拠れば、「善、価値あるものの可能性は実現への要求を含んでいる」²¹のであり、客観的な事実として世界に存在しうるものである。言い換えるなら、そうした「実現への要求」を含む存在者はその存在において善である、ということである。ヨナスはそうした存在者として生命を挙げる。というのも、生命は自らの存在を目的として存在しており、目的をもつということはその可能性の実現を要求するからだ。ヨナスに拠れば、「そもそも目的をもつことができる、という能力のうちに、私たちはそれ自体としての善を見出すことができる」²²。そうである以上、生命はそれ自体で善であり、責任の対象と

¹⁹ *ibid.* 84

²⁰ *ibid.* 235

²¹ *ibid.* 153

は生命である²³。そして、「生まれたばかりの子ども」はこうした責任概念をもっとも明証的に経験させる存在に他ならない。子どもは誰かが助けなければ容易に死んでしまう傷つきやすい存在である。ヨナスに拠れば、「責任のありかは、生成の海につきり、可死性に委ね渡され、消滅の脅威に震える存在であって、乳飲み子はこのことを模範的に示している」²⁴。その限りにおいて、ヨナスにとって「生まれたばかりの子ども」は「責任の原初的な対象」²⁵なのである。

以上のような論証に基づいて、ヨナスは非相互的な責任概念を規定する。こうした責任概念に立脚するとき、未来への責任は、その責任の対象となる未来世代との合意に基づいて基礎づけられるのではなく、むしろ、その未来世代の存在の善さに基づいて基礎づけられることになる。その上でヨナスは未来への責任の定言命法を「あなたの行為の影響が、地上における真に人間らしい生き方の存続と矛盾することがないように、行為せよ」²⁶という定言命法の形で表現している²⁷。

4. 『責任という原理』における出生概念 (1) 反ユートピア主義

以上のような仕方でも、科学技術文明に対する新しい倫理学を基礎づけようとするヨナスにとって、最大の仮想敵はマルクス主義の哲学者エルンスト・ブロッホだった。そもそも、ヨナスの『責任という原理』はブロッホの『希望という原理』に対するオルタナティブとして構想された書物である。ヨナスに拠れば、ブロッホは同書において進歩史観に基づくユートピア主義を前景化し、

²² *ibid.* 154

²³ 善をめぐるヨナスの形而上学的な分析については次の文献が詳しい。cf. Hösle (1994)

²⁴ Jonas (2003 a) 228

²⁵ *ibid.* 234

²⁶ *ibid.* 36

²⁷ ただしヨナスは、子どもへの責任から直ちに未来への責任を説明するのではなく、そうした責任の可能性への条件へと遡及する「形而上学的演繹」(Jonas 1992)によって基礎づける。形而上学的演繹については次の文献を参照のこと。戸谷洋志 (2015) 31-44

人類の解放のために科学技術文明の発展を要請している。しかし、ヨナスの立場からすれば、科学技術文明は環境破壊をはじめとする様々な被害をもたらしているものであり、そうした潜在的な危険性を閉却するブロッホの見解は楽観的に過ぎる。また、潜在的な危険性の有無を度外視したとしても、ブロッホの主張には問題がある、とヨナスは指摘する。ブロッホのユートピア主義は、人類の本来のあり方が未来において初めて実現され、人類の歴史はその実現に向けた進歩の歩みとして解釈される。ヨナスはこうしたブロッホの思想を『『まだ - ないという存在』の存在論』²⁸として性格づける。すなわちその存在論において、人間は原理的にまだ本来の存在ではないものとして解釈される。しかしその「まだ - ない」は、新しい人間の誕生を特定の既存の目標へと方向づけ、それ以外の可能性を否定すること意味する²⁹。

こうしたブロッホの存在論に対して、ヨナスはアーレントの出生概念を引用し、次のように反論している。

〔ブロッホの「まだ - ないという存在」の存在論は〕特にハンナ・アーレントによって非常に印象深く強調された、次のような人間の行為の固有性を意味するものではありえない。その固有性とは、人間の行為が、その度ごとに、絶え間なく、繰り返し、新しいものを、まだここになかったものを、期待されていないものを、そしてひとを驚かせるものを、言い換えるなら原理的に予測不能なものをこの世界にもたらし、ということである。この固有性はまさに「期待」を挫折させることを意味するのであって、周知の「目標」にも、秘匿された「目標」にも関わりがなく、私たちがよく知っているように、「望まれていること」と必然的に関係するものでもありえない。この固有性は、自由それ自体から帰結する以外に、「出生」という根本

²⁸ Jonas (2003a) 370

²⁹ ただし、こうしたヨナスによるブロッホ解釈には様々な問題が指摘されている (cf. 小田 2007)。ここでは、その解釈の妥当性については検討せず、あくまでもヨナスの主張の再構成を行うことに限定する。

的な事実から端的に帰結する。出生は可死性の対極にあり、この世界に絶え間なくより新しい個人が、つまり新たに始まっていく個人が登場するという事実でもある。この事実は、ユートピアが誕生を抹消しない限りは、たとえユートピアが達成されたとしても存続するし、予測できない仕方で開かれていることによって、またユートピアが未完成であることを保証するのである³⁰。

ここでヨナスが出生概念から導き出している人間の「固有性」は次の三つの観点から説明されよう。第一に、ヨナスにおいて人間の出生は「新しいもの」であり、「原理的に予測不能」である。新たに生まれてきた人間はこれまで生まれてきた過去のどんな人間とも違う。だからこそ、その人生を過去の事例に照らし合わせて正確に予測することは不可能である。第二に、人間が新たに出生するものであるからこそ、人間は驚くべきことをなすうる存在である。それは、事前に予見されていたこと、たとえば「期待」や「目標」や「望まれていること」を裏切り、それらを「挫折させる」ことができる、ということの意味する。第三に、「出生」は「可死性」と相即的な関係にある。したがって新しい人間の誕生は、既に生きている人間の死と軌を同じくし、世代交代を可能にし、それによって世界が「絶え間なく」新たに更新されていく、ということの意味する。ヨナスに拠れば、こうした人間の「固有性」はブロッホの存在論と原理的に両立しえない。

このように、『責任という原理』におけるヨナスの出生概念の受容はユートピア主義への批判という形で現れる。ヨナスにとって出生概念は未来への責任を考察するための一つの人間学的な準拠点として機能しているのだ。

5. 『責任という原理』における出生概念 (2) 未来の複数性

反ユートピア主義の立場に基づく出生概念の援用は、決してブロッホという

³⁰ ibid. 378

一人の哲学者を批判するだけに留まらず、むしろ画一化・匿名化の傾向をもつ科学技術文明の動向そのものに対しても批判を投げかけるものでもある。一方で、科学技術文明に対してヨナスが要請する新しい倫理学は、前述の通り、まだ生まれていない未来の世代に対する責任である。ヨナスが出生概念に準拠する以上、この責任概念は出生概念と整合するものでなければならない。言い換えるなら、未来への責任は、単に同じ人間が反復的に生まれてくることへの責任ではなく、新しい人間が生まれてくることへの責任として性格づけられなければならない。ヨナスは次のように述べる。

その時々、別々の仕方では本来のものは、自分自身を証示することで生き残るか、あるいは無力に終わるのかの、いずれかでなければならない。したがって、次のようなことが受け入れられるべきである（そしてそれは実際には難しくはないはずだが）。すなわち、イザヤとソクラテス、ソポクレスとシェイクスピア、仏陀とアッシジのフランシス、レオナルドとレンブラント、ユークリッドとニュートン、彼らはどうしても「凌駕」されえない、ということだ。歴史を通じて発揮される彼らの輝きは、その輝きの連鎖が途絶えることはない、という希望を与えてくれる。その希望のために行いうるのは、彼らを生んだ密かな大地を枯死させないよう予防することだけである（その枯死は、技術と、テクノロジーによって導かれたユートピアとの様々な傾向によって、その大地を脅かしているのである）³¹。

ここでは前節と同様にユートピア主義への批判が展開されている。前述の通り、ユートピア主義は未来において実現される人間の本来性を一つに特定するが、これに対して新しいものとして誕生する人間は「別々の仕方では」自らの本来性を示す。ここに示唆されているのは出生概念の帰結としての人間の複数性である。ユートピア主義は過去を未来の前段階として捉え、未来よりも劣った

³¹ ibid. 387

ものとして解釈するが、歴史において展開される出来事はあくまでも複数のであって、そこに優劣を測定しうるような画一的な基準はない。そうした歴史の連続性は、未来においても新しい人間が誕生し、現在においては予測できない出来事が引き起こされる、という「希望」を可能にする。未来への責任とは、そうした「希望」が失われないよう配慮すること、言い換えなら、複数性をもたらす「密やかな大地を枯死させないよう予防すること」である。それはすなわち、人類の歴史から「出生」が失われないよう配慮する、ということの意味している。

以上のような論証に基づいて、ヨナスは未来への責任を、単なる人類の生物学的な生存への責任としてではなく、人類が新しい可能性へと開かれた存在として存続し続けることへの責任として性格づける。

今まさに問題になっていることは、特定の間像を永続化させることでもなければ、そうした人間像をもたらすことでもなく、第一に、可能性の地平を開くことである。その地平は、人間の場合には種それ自身の実在によって与えられ、そして——私たちが「神の似姿」という約束を信じざるをえないように——人間の本质に常に新しい可能性のチャンスを提供するであろうものである³²。

ヨナスに拠れば、人類の存続への責任とは、「特定の間像を永続化」させることではなく、「可能性の地平を開くこと」である。それによってこれから生まれてくる未来の世代は、現在において自明視されている人間像を覆し、新しい人間像を樹立することができる。その意味において、未来への責任とは同時に未来の複数性への責任である。

³² ibid. 250

6. 『責任という原理』における出生概念 (3) 延命技術への批判

前述の通り、出生は可死性と表裏をなす概念である。そうである以上、未来への責任は可死性が可能であることへの責任をも伴うのでなければならない。ヨナスに拠れば、「死は、アーレントが非常に印象深く記述した、出生の裏側でしかない」³³。こうした観点からヨナスは人間の不死の技術的な実現に対して批判的な立場をとる。何故なら、もしも人類が不死を実現し、この世界で誰も死ななくなってしまった場合、地球上の資源が有限であるために、新しい人間の誕生を中止しなければならなくなるからだ。この批判はある意味で逆説的である。というのもヨナスは、一方において人類の存続への責任が担われなければならないと主張しながら、他方において新しい人間の誕生を可能にするために、個々の人間は死ななければならない、と主張しているからである。ヨナスは次のように述べる。

私たちが死を廃止するなら、私たちは生殖をも廃止しなければならない。何故なら、生殖は死に対する生命の応答であるからだ。そうなれば、私たちは、若者のいない老人の世界だけを有し、今まで一度も存在しなかった人々による驚きが欠落した、既に知られた人々の世界だけを有することになるだろう。しかし、恐らく、私たちが死ぬという過酷な定めのうちには、次のような教訓もまたある。すなわち、死ぬということは、永遠に新しくなっていくという約束を私たちに提供しとする、ということだ。その約束は、他者性それ自体の流入と共に、始まりのうちに、直接性のうちに、若者の情熱のうちに、存している。これに代えられるものは、過去の経験の大いなる集積のうちには決して存在しない。過去の経験は、世界を初めて新しい眼で見るという特権を、再び得ることは決してできない。また、プラトンが哲学の始まりと称した讃嘆をもう一度体験することも決してでき

³³ ibid. 49

ない。大人の知識欲においてはしばしば無視されるような、子供の好奇心をもう一度体験することも、決してできない。その好奇心は、大人になるまでの間に、磨滅してしまう。常に - また - 始まることのうちに存する以上のことは、単調さとルーチンワークのうちに埋没することから人類を守り、生命の潜在性を守るチャンスを人類に与えるような、人類の大きな希望でありえる。そして、この常に - また - 始まるということは、常に - また - 終わるといふことの代価でしかない³⁴。

ここでヨナスは出生がもつ人類への効用について論じている。ヨナスに拠れば、出生はこの世界が「永遠に新しくなっていくという約束」を意味し、「世界を初めて新しい眼で見るといふ特権」を人類に与える。そしてそれは「単調さとルーチンワークのうちに埋没すること」を回避すること、言い換えるなら、匿名的な画一性の一元化に対して抵抗することを意味している。そうした可能性を開くために、すでに生きている人間はあくまでもいつか死ぬことを要請されるのだ。

以上のように『責任という原理』において出生概念は重層的な機能を果たしている。改めて要約すれば、それは第一に反ユートピア主義の論拠として用いられ、第二に未来への責任に複数性への眼差しを開き、第三に不死の実現という医療技術に対する批判の論拠として用いられている。

7. 批判的再検討——ヨナスによる出生概念の解釈

本稿がこれまで検討してきたように、ヨナスは『責任という原理』においてアーレントの出生概念を受容し、それによって自らの理論を深化・発展させている。ただし、前述の通り、ヨナスとアーレントとでは出生概念が用いられる文脈が大きく異なる。ヨナスが科学技術文明の倫理を主題とするのに対して、アーレントが主題としていたのは人間の活動的生活であり、特に政治であった。

³⁴ ibid. 49-50

したがって、アーレントからヨナスへと受容されることで、出生概念は異なる文脈へと移植されていることになる。当然、その過程でヨナスは出生概念に対して独自の解釈を施している。以下では、ヨナスとアーレントの文脈の違いを念頭に置きながら、ヨナスによる出生概念の解釈を批判的に再検討していく。

ヨナスによる出生概念の解釈において顕著であるのは、第一に、この概念が誕生する人間自身の観点からではなく、子どもを誕生させる親の視点から語られているということだ。前述の通り、ヨナスにとって責任の原型は子どもであり、出生概念はその責任を性格づける概念として機能する。つまり、親が子どもに対して、あるいは現在世代が未来世代に対して、さらに言い換えるなら、既に存在しているものがまだ存在しないものに対して関係する様式を説明するために、出生概念は用いられている。その意味で、ヨナスはアーレントとは異なる視座から人間の「出生」を捉えている。

第二に、ヨナスは可死性を出生の必然的な条件として解釈している。アーレントにおいても、出生と可死性は対概念として論じられているが、しかしそこで前者が後者によって条件づけられるという論理的な関係が説明されているわけではない。これに対してヨナスは、そうした論理的関係を前提とし、出生の可能性のために既に生まれている人間に死を要求している。前述の通り、ヨナスの主張する人類の存続への責任とは、ある特定の人間たちが永遠に生きることによって実現されるのではなく、あくまでも新しい人間が生まれることによって、つまり世代交代によって実現されるものである。したがって、その責任は各世代が死んでいくことをそのうちに含んでいる。

一方で、ヨナスとアーレントの間には根本的に対立する論点もある。アーレントはヨナスが『責任という原理』を公刊する以前に死去しているため、同書に対するコメントを残していない。しかし、ヨナスは同書の公刊に先立って草稿をアーレントに送っており、それに関する感想を求めていた。その際にアーレントが述べた批判的なコメントをヨナスは次のように回想している。

アーレントは、人間の根本的責任が自然秩序によって生命論的に基礎づけ

られうるということをおよそ完全に否定した。彼女の観点からすれば、人間の根本的責任とは、ポリスによって、つまり国家的あるいは政治的な共生によって生じるところの、自由に樹立された関係であった。彼女は、家族の絆によって担われる私的領域と、政治的共同体によって担われる公的領域を明確に区別したアリストテレスを引き合いに出した。彼女はこの考え方を堅持し、公共の福祉に対する責任というものはその本質において人為的なものであり、また非自然的なものであって、西洋の伝統に従えば「社会契約」に基づくものである、という意見だった³⁵。

この証言は、アーレントによるヨナスの解釈と評価を知る上で貴重な資料である。ここには次のような両者の明白な対立が示されている。ヨナスが責任の根拠を生命の善のうちに洞察し、責任をあくまでも自然に基づく概念として捉えるのに対して、アーレントにとって責任はあくまでも「社会契約」に基づく「国家的あるいは政治的な共生」によって成立する「人為的」な概念である。また、ヨナスは責任の原型を子どもへの責任として定式化するが、アーレントにとって親と子どもの関係はあくまでも私的領域に属する事象であり、責任が本来属する公的領域とは原理的に異なる。こうした両者の立場の違いは出生概念の解釈にも不可避に影響を与えることになる。ヨナスは確かに出生概念への準拠によって人間の複数性を擁護しているが、しかし自らの立場を首尾一貫させるためには、そうした複数性によって交わされる公共的な社会的関係よりも、子どもに対する親の私的な責任を優先させざるをえない。あえてアーレントの思想の枠組みを適用するなら、ヨナスは公的領域よりも私的領域を重視するという立場を取ることになる。言うまでもなく、それはアーレントにとってまったく許容できない思想であったに違いない。ただし、こうした「私的／公的」という区分そのものが、ヨナスの哲学には適用できないこともまた事実である。前述の通り、ヨナスは子どもへの親の責任を愛情に還元するのではなく、あら

³⁵ Jonas (2003b) 324

ゆる生命が善であるという形而上学的な命題によって基礎づけているからだ。その命題に従えば、生命はそれ自体で善なのであって、親にとっての私的利害には関係がない。そうである以上、子どもへの責任を「私的」と考えることは不可能である。ただし、だからといってヨナスの責任概念が公的領域に属するわけでもないことも、また明らかである。

したがって、第三に、ヨナスはアーレントから出生概念を継承してはいるものの、その概念がもともと属していた政治思想の枠組みまでも踏襲したわけではない。ヨナスの出生概念からは私的領域と公的領域という概念区分との連関が欠落している。そうした欠落がヨナスによる同概念の未来倫理への移植を可能にしているのである。

むすびにかえて

以上において本稿は、ハンス・ヨナスの倫理思想における出生概念の受容を検討してきた。改めてその議論を振り返っておく。

「出生」はアーレントが『活動的生』のなかで定式化した概念である。アーレントにおいて同概念は、第一に、人間がこの世界に新しい存在として誕生すること、第二に、人間が新しい事柄を始める能力をもつということ、第三に、人間は一人一人異なる唯一の存在である、という人間の性格を表している。こうした人間の複数性に根差しながら、共に生きる人々が互いに言論を交わす領域こそ、アーレントにおける公共性に他ならない。したがって、出生は公共性の基礎を形成する概念である。

学生時代からアーレントと親友であったヨナスは、この概念を高く評価し、自らの哲学に取り込んでいった。主著『責任という原理』において、ヨナスは科学技術文明の潜在的な危険性を指摘し、これに対して子どもへの責任を原型とした未来への責任を基礎づける。こうしたヨナスの倫理思想において出生概念は次の三つの機能を果たしている。第一に、それはヨナスに反ユートピア主義の準拠点を提供している。ヨナスに拠れば、ユートピア主義は科学技術文明に対して楽観的であるだけでなく、人間の「出生」を閉鎖させる危険性をもつ

ている。これに対して、あくまでも新しい人間の誕生が保護されるべきである限り、ユートピア主義は相対化されなければならない。第二に、出生概念は責任概念に複数性の次元を開く。未来への責任は、新しい人間が生まれてくることへの責任であり、それは言い換えるなら、未来の人間の複数性への責任である。そうした可能性の地平を開き続けることこそ、ヨナスの主張する科学技術文明に対応すべき倫理学である。第三に、「出生」は可死性と相即的な関係にあるために、「出生」が可能であるための責任とは、同時に、可死性が可能であるための責任を意味する。したがって、未来への責任は人間の不死の技術的な実現と対立するものである。既に生きている人間は、これから生まれてくる新しい人間のために、死ななければならないのだ。

以上のような受容を顧みるとき、そこにはヨナスによる出生概念への独自の解釈が示されている。第一に、ヨナスは「出生」を、誕生した者自身の視点からではなく、子どもを誕生させる親の視点から捉えている。また第二に、ヨナスは「出生」と表裏一体の概念として可死性を挙げ、可死性がなければ「出生」もまた成り立たないという、論理的な関係を前提にしている。第三に、ヨナスの「出生」概念には私的領域と公的領域との概念的な連関が欠落している。特に第三の点は、ヨナスとアーレントとの根本的な立場の違いを示すものである。

アーレントの政治思想の正確な理解を基準とするなら、ヨナスによる出生概念の解釈は誤読と見なされるかも知れない。しかし、少なくともそれはヨナスの倫理思想にとって生産的な誤読であった、と評価されよう。何故なら、ヨナスは出生概念を用いることで、自らの倫理思想のうちに、未来の人々の複数性への視点を組み込むことを実現したからだ。未来への責任とは、ただ人間が生物として生存することへの責任ではない。むしろ、未来においても新しい人間が誕生し続け、そこで人々の予測を裏切る出来事が引き起こされ、そうした複数性が維持されることへの責任である。ここには、未来の公共性を考えるための、一つの可能性が示されているはずである。

参考文献

- Arendt, Hannah (1967) *Vita activa. oder Vom tätigen Leben*, Piper
- Auras, Christiane (2008) 'Zuhause im Exil – Hannah Arendt und Hans Jonas. Eine Lebens-Freundschaft im Schatten des Nationalsozialismus', in D. Böhler/H. Gronke /H. Hermann (eds.) *Menschen-Gott-Welt. Philosophie des Lebens. Religionsphilosophie und Metaphysik im Werk von Hans Jonas*, Rombach: 383-400
- Hösle, Vittorio (1994) 'Ontologie und Ethik bei Hans Jonas', in D. Böhler (ed) *Ethik für die Zukunft, Im Diskurs mit Hans Jonas*, C. H. Beck: 105-125
- Jonas, Hans (1976) 'Acting, Knowing, Thinking: Hannah Arendt's Philosophical Work', *Social research*, 44 (1) :25-43
- (1992) *Philosophische Untersuchungen und metaphysische Vermutungen*, Insel
- (2003a) *Das Prinzip Verantwortung. Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*, Suhrkamp
- (2003b) *Erinnerungen*, Insel
- Vogel, Lowrance (2008) 'The Responsibility of Thinking in Dark Times: Hannah Arendt versus Hans Jonas', in D. Böhler/H. Gronke /H. Hermann (eds.) *Menschen-Gott-Welt. Philosophie des Lebens. Religionsphilosophie und Metaphysik im Werk von Hans Jonas*, Rombach: 401-422
- Wiese, Christian (2007) *The Life and Thought of Hans Jonas: Jewish Dimensions*, Brandeis Univ
- 出雲春明 (2010) 「子供への責任をめぐる二つの政治的言説—アレントとヨナス」『倫理学』26:33-42
- 小田智敏 (2007) 「自然と技術—ハンス・ヨナスのプロッホ批判の検討」『ヘーゲル哲学研究』7:38-51
- 戸谷洋志 (2015) 「ヨナスにおける個別的命令と存在論的命令の区別について」『メタフィシカ』46: 31-44
- 山口充 (2008) 「「出生」をめぐる人間形成論的連関」『愛媛大学教育学部紀要』155: 1-10

(とや ひろし)

(2018年2月22日受理)